

#### 4. 午前の実践報告を受けてのまとめ

片田 敏孝 (群馬大学大学院 教授)

ここまで釜石のことを中心に話をさせていただいたのですが、みなさんはどう感じられたでしょうか。一つ、共通すると思っているのは、「どうか孤軍奮闘しないでいただきたい」ということです。非常に重要なことだと思っています。各地大勢、本当に頑張っておられる先生いらっしゃいます。その多くが学校の中で孤軍奮闘しているなと思います。それから、その地域全体から見たときに、学校の防災教育が孤軍奮闘しています。市役所の行政との関わりを見ても、学校の防災教育だけが孤軍奮闘しています。釜石の話をついても、釜石東中学校のこれまでの状況を見ても、加藤孔子先生（震災当時の釜石小学校校長）についても全然孤軍奮闘していません。ここに参加されているみなさんの多くは、「具体的に教室で何を教えたか」ということに関心があると思いますが、みなさんの地域とそう変わるものではありません。何が大きく違うのかというと、少なくとも「自分ひとりの力で何とかしてやろう」とは思っていない点です。



現実の行動を見ると、地域は同じ災害属性・同じ条件の中にみんな共同で暮らしています。その中で子どもたちは一人ひとりが自分の命を守り抜かなければいけないし、地域みんなまで被害を軽減しなければいけません。防災は、この動きをみんなで作っていかねばいけません。このように言うと、地域の防災の仕事、市役所の防災の仕事と思われるかもしれませんが、しかし、その枠の中で、学校として果たす役割、中学生・小学生・それぞれが「地域全体で犠牲者を一人も出さない」ということに対して、どう役割を担うべきなのか、ちゃんとその意識を持たせることが必要です。村上先生や森本先生、加藤先生と釜石小学校の先生のかつての動きを見てみると、ずけずけと地元に行って防災リーダーの方に喋らせるなど、どんどん地域にでて地域との連携をはかっていました。そして地域の方々はそういう子どもたちを見ていてくれました。子どもたちにとっても、自分たちの活動が学校で受けている防災教育の一環ではなく、子どもたちがそこで地域の役割を担うわけです。この実践の中で子どもたちは自分の活動、行動を学習上の意味ではなく、この地域の安全というものに自分がどう貢献しているかという実感を持ちます。学んでいるのではなく自分は貢献している、こう関わっているという実感です。子どもたちにすれば、リヤカーを引いておばあちゃんに言われた一言や、保育園の子どもたちとやりとりする中で保育園の子どもたちが慣れてくれるような小さなことかもしれません。だけでも、子どもたち一人ひとりが実感しているのは、この地域の防災の役割をちゃんと自分が担っているというこの実感なのだと思います。

防災教育というと、どうしても他の教科科目と同じようにその時間の中の授業計画を通して、子どもたちの学習目標が何で何をどう教えているかの議論をし始めがちです。それも必要ですが、防災教育というのを教室で教える教科としてその中身を議論する前に、その位置づけをしっかりとしなければいけません。それは、先生方も学校の管理職の方も、地域の安全問題の実務に向かい合っている市役所の防災との連携を密にとることです。防災教育のための「あいうえお」を議論する前に、この地域の防災に対して、学校として、子どもたち一人ひとりとして、どう向かい合うのかということをごんごん子どもたちに示し、求め、意識を持たせて、それを動かしていくことです。一つひとつ小さなことだけでも、役立っているという実感を持つことです。子どもたちも学んでいくのではなく、自分も関わって自分も

学んでいる、自分も貢献しているという実感の中で自分の存在を確認し、自己肯定感もあり、地域の一人として生きているのだという実感を持つことができます。そうやってきたからこそ、釜石東中学校の子どもたちは卒業した後も、自分の果たす役割を避難所で一生懸命活動していました。それは何を習って何の知識を習得したという姿ではなく、子どもたちが本当にそういう子になったということです。そういう人間になったということです。防災教育は何を教えるかとかいうことではなく、子どもたちがどういう人間になっていくのかということそのものに関わりを持つような教育だと思います。

釜石の防災教育は、震災以前に取り組みを開始した。最初の方は全然だめでした。何を言っても言うことを聞いてくれない、邪魔くさがられていた私でした。しかし、震災のちょっと前くらいから先生方との意思の疎通ができてきて、先生方も地域とやりとりしていく中で「防災教育ってこういうことなのだ」という言葉にはできない実感を持ちました。それは「具体的に教室の中では何を教えるか」というそんな細かな話ではなく、それ以前に「防災教育の地域の位置づけをちゃんと考えることができるか」ということです。

各地域の先生方もとてもご苦労されていると思います。学校の中では孤軍奮闘していて、ひょっとすればまわりの先生からは「お前がこんなことをやるから、こちらもやらなきゃいけないじゃないか」と思われているかもしれません。学校の中で頑張っている地域を見るとそんなでもないし、「なんで学校だけこんなことになっているのだ」と思われるかもしれません。しかし、外へ出て行かないとダメです。先生が個人として防災教育をやっているわけではないです。それではできることの限界があります。だからこそ、外に子どもたちの全体の環境をどう構成してやるかということです。もちろん授業の中でも先生方には頑張ってもらえるのだけでも、学校全体を巻き込み、地域を巻き込み、何よりも市の防災とちゃんと連携しないとダメだと思います。学校だけでクローズしている限りにおいては、子どもたちは防災を学校の中の教育だと思います、「学校で習う教育の一環として僕はやっている」と。そうではなくて市の防災も絡んで、地域の市防災の方と連携していく中で、「僕らはこの地域の防災の標本になっているのだ」と実感ができます。学校においてクローズしている部分では、やっぱり教育を受けているという感覚になります。これではダメだと思います。子どもたちに「地域や学校全体、地域、市の防災、地域全体の問題の中で、現実の役割を僕は担っている」という実感をどれだけ与えるかです。それが単なるこれまでの教科科目と大きく違うところであり、一つ教科を教えて一つ知識が増えたということではなく、子どもたちを一人の人間として育てていくこと、人間として大きくしてやること、人間としての成長をさせてやることへつながっていくのではないかと私は思います。

先生方の現場のことは私もわかっているつもりなので、本当に地域との関わりは大変だろうなと思います。「あの地域で、先生はよく頑張っているな」と思うような状況がたくさんあります。市役所、教育委員会、学校と関係性がないところもあります。少なくとも釜石は、偶然ですが、当時防災の課長の菊池郁夫さんとのつながりから始まって、教育委員会に行ったらそこにもいて、そのあと何代か続いた防災課長は教育委員会の経験者でしたので幸いでした。市の防災と教育委員会が完全に一致しているようなところがあり、みんな経験者でわかっています。子どもたちを育てていくことの防災上の意味合い、それが本質だということもよくわかっています。うまくいったところがあります。そこに学校の校長先生・教頭先生あたりの理解の中で地域と



の連携が非常にうまくいって、その中で動いていっています。これも環境の問題なのだと思います。まず先生方個人としての教育技量をどう考えるかということもわかりますが、それ以前の問題として、防災教育の環境整備みたいな話が非常に大きな割合を占めるということを僕は実感としては持っております。だから、よく「学校・家庭・地域で取り組む防災」ということをキーワードにしています。全部まとめて子どもたちを育む環境といいますが、それよりも防災教育の子どもたちにとって実（じつ）を感じる瞬間、それを設計しています。



何を教えるかということですが、釜石の子どもたちは本当に良かれ方向に向かっています。あの子たちが次の釜石を作ってくれるなってそんな実感を持つことができます。現実問題として子どもたちはちゃんと変わっています。何がその根本なのでしょう。正直、さきほどのいのちの教育推進委員会と一緒にやっている釜石の先生方と作っているテキストだって別に特別なものではありません。教えていること、中身そのものが特別なことではありません。でも子どもたちは変わっています。その差は何かということなのです。もちろん教える中身が効果的・効率的であることは大事だし、そのための授業計画を立てていくこと、そこにどういう中身を盛り込んでいくかということも大変重要です。ただそれ以前の問題がそこにもあるなと思います。教師と子どもの関係も人と人との関係だと思います。教師が教育委員会から防災教育をやらされている、防災教育のテキストづくりはみんなやっておりますので、資料があったとこれ幸いで、それをもとにコピーをとって授業で配ってその授業のコマ数をこなすこと、これは簡単です。しかし、それだけを淡々とやっただけで子どもたちは本当に変わるのか、たぶん変わりません。子どもたちも感じ取ります。「ああ、防災教育っていうのは、やらないといけないことになったんだな」と。こんな思いで聞いている子どもたちに本当の変化なんてあらわれることがないのです。

今日こうやって集まっていたいただいていることの趣旨です。今の釜石の話の聞いただけでも、子どもたちが本当に変わっています。その他今日ご報告いただく事例、子どもたちがこう変わったという事例をいっぱいお聞きすることができます。その時に何を教えたかということが、どうでもいいわけではありません。しかし、教えた項目を聞きたいわけではなく、なんで子供が変わったのか、なんで子どもにこういう変化があらわれたのか、どうして釜石の子どもたちになってくれたのか、その背景はなんなのか、ということです。多くの場合やっている当の本人は気づいていません。森本先生は森本先生で「私はこういうことをやりました」とおっしゃっただけです。おそらくなぜ子どもたちがあんなっていったのかということについては、自然とそうなっていったというふうに森本先生ご自身は思っていると思います。村上先生は村上先生でそう感じていると思います。ですけど、あきらかに変わっているというプロセスを踏んでいるときに、それを僕ら第三者から客観視したときに、かならずや自分と違う何かがあります。子どもたちと先生との、この関係の間において何か違うものがあるのです。やっている当人は自分のやっていることのままですから、何も特別なことをやっているという思いもないだろうと思います。それぞれうまくやっておられる先生方、僕から見て「こういうやり方もあるのか」「ああいうやり方もあるのか」といっぱい見えています。でも、それが“何”ってご本人は言えません。ここで状況を我々が感じ取って、あの先生のこういうやり方、思い、姿勢、環境、何なのかわからないけれど、これでうまくいっているのかということ客観視していかないといけません。淡々と話されると思います。「うちの学校ではこういうことをやってこの子たちはこうなりました」、そして、その周辺関係の情報

がばらまかれると思います。そこから感じ取っていただきたいのです。「なんで子どもたちは変わったのだろうか」、「その本質はどこにあったのだろうか」、それを炙り出したいわけです。そのための研究会です。ですから「一つひとつの実践で何をどうやった」みたいなところは、適当に聞いてくださって構いません。そこが大事なわけではありません。「子どもたちに配布したその資料ちょうだい」なんて話もどうでもいいです。そういうことではなく、「なんで子どもが変わったのか」、それを持ち帰っていただきたいと思っています。

今、感じていることはそういう面で、防災教育は孤軍奮闘しないでください。地域の中での実際の防災の位置づけとして子どもたちにどう自覚させるか、学校で習っていることではない、この地域の問題に「僕が関わっている」というこの意識を持たせることです。子どもだからできることはこれだけだけど、でも「僕は保育園の小さな子どもにありがとうと言ってもらった」「手をつないでも泣かなくなった」「おばあちゃんにありがとうと言ってもらった」という、それだけでもいいです。その環境を整えるということの枠組みがすごく重要だと思います。どうか孤軍奮闘しないでいただきたいです。実の防災の中の位置づけというのを明確に持てるような防災教育を考えていきたいです。それが大きな話の一つです。

もう一つは技術の問題になっていきますが、子どもたちと向かい合っている個人の先生と子どもたちの間で、子どもたちが変わっていくということはどういうことか、ということについてです。「やらされているからやっている」みたいな思いがあったら、簡単に子どもたちは見透かします。「先生はみんなに死んで欲しくない。大きい津波が来るかもしれない。でもこの地域から一人も犠牲者を出さないこと。みんなも死んじゃダメだ。」、「この地域のみんな死んじゃダメだ」という思いの中で、先生がそれを願って子どもたちに語ります。その思いが伝わったときに、私は「共感」というものが生じると思います。子どもたちに何か喋って、子どもたちが変わってくれたのであれば、そこには共感しかありません。子どもたちと共感できるコミュニケーションというものに定型はないと思います。私は私なりのコミュニケーションの仕方です。子どもたちは暑苦しいなと思っているかもしれません。それは私のコミュニケーションの仕方だから私はこれでいいのです。いろんなパターンがあると思いますが、それはいったいどの辺にポイントがありそうなのかということを手掴んでいってほしいです。



以上の2点に着目して、今日は話を聞いていただければと思います。